



日本学士院ニュースレター

2020. 4 No. 25



第 27 代日本学士院長に井村裕夫会員（総会で議事を進める井村新院長）

日本学士院は、塩野 宏院長の任期満了に伴い、令和元年 10 月 15 日開催の第 1132 回総会において選挙を行い、井村裕夫会員を日本学士院長として選定しました（関連記事 13 ページ参照）

目次

令和 2 年度日本学士院賞	2	第 27 代日本学士院長に井村裕夫会員	13
新客員選定	5	新幹事の選定	13
竹市雅俊会員がガードナー国際賞受賞	5	新会員選定	14
講演会レポート	5	『学問の山なみ』から一歴史をつくった会員―	15
第 16 回日本学士院学術奨励賞	7	会員・客員の逝去	16
国際学士院連合第 90 回総会	9	会員の近刊紹介	16
会員寄稿（川本皓嗣会員）	11	編集後記	16
学士院の歩み	12		

令和2年度日本学士院賞

令和2年4月6日、日本学士院賞9件9名（うち斎藤通紀氏に恩賜賞を重ねて授与）並びに日本学士院エジンバラ公賞1件1名を決定しました。

恩賜賞・日本学士院賞

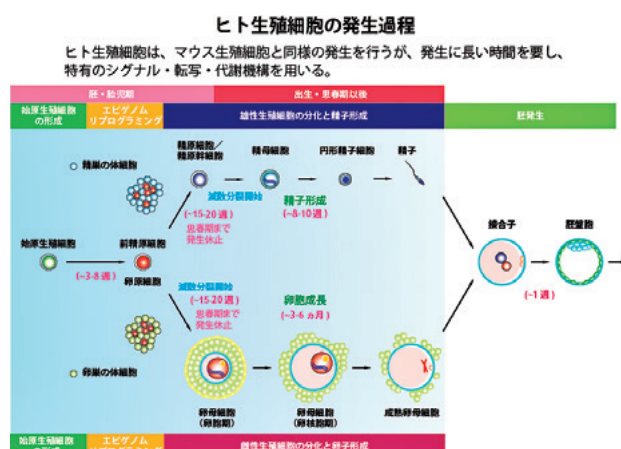
「生殖細胞の発生機構の解明とその試験管内再構成」

斎藤 通紀（さいとう みちのり）

京都大学高等研究院教授、京都大学高等研究院ヒト生物学高等研究拠点長、京都大学大学院医学研究科教授、京都大学 iPS 細胞研究所連携主任研究者



生命の根源たる生殖細胞の発生機構を解明、マウス・サル・ヒト多能性幹細胞から生殖細胞の発生過程を試験管内再構成する研究を確立し、生殖生物学の発展に大きく貢献すると同時に、医学に新しい可能性を提示した。



日本学士院賞

Königliche Gerichtsbarkeit und regionale Konfliktbeilegung im deutschen Spätmittelalter: Die Regierungszeit Ludwigs des Bayern (1314-1347)

（『ドイツ中世後期の国王裁判権と地域における紛争解決：ルートヴィヒ・デア・バイアーの治世（1314年—1347年）』）

田口 正樹（たぐち まさき）

東京大学大学院法学政治学研究科教授、北海道大学名誉教授



ドイツ中世後期ルートヴィヒ王の治世に焦点を当て、この時代の国王裁判権の実態を地域史の方法と、中世の紛争解決研究の最新の知見を踏まえて史料調査を行い、当該分野の研究に新たな展望を開いた。



Königliche Gerichtsbarkeit und regionale Konfliktbeilegung im deutschen Spätmittelalter: Die Regierungszeit Ludwigs des Bayern (1314-1347)(Duncker & Humblot, 2017)

日本学士院賞

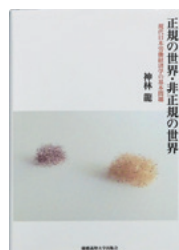
『正規の世界・非正規の世界—現代日本労働経済学の基本問題』

神林 龍（かんばんやし りょう）

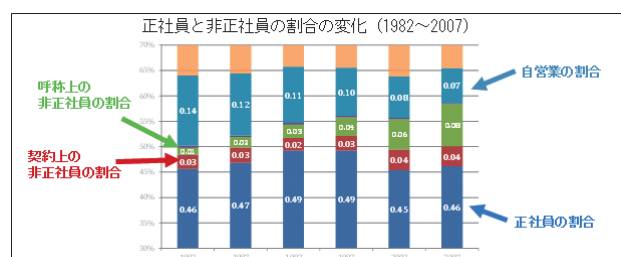
一橋大学経済研究所教授



1980年代以降進行している非正規雇用の増加が正規からの脱落ではなく、自営業縮小によるものであることと、賃金構造とタスク構成における二極化現象の実態とを明らかにし、労働経済の基調とその歴史的な変容を描き出した。



『正規の世界・非正規の世界—現代日本労働経済学の基本問題』（慶應義塾大学出版会、2017年11月）



日本学士院賞

「単一分子分光を用いた固体表面上での化学反応の研究」

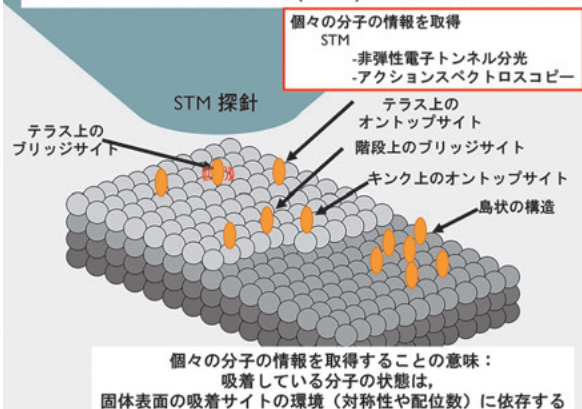
川合 真紀 (かわい まき)

分子科学研究所長、日本化学会会長、
東京大学名誉教授



金属表面に吸着する分子から空間的に1つの分子を選んで、その状態（特に振動状態）を定量的に観察する手法を開発し、かつ、吸着分子の化学状態を選別した化学反応を実現した。触媒の機構解明に資する成果である。

走査トンネル顕微鏡 (STM) による単分子計測



日本学士院賞

「希ガスの地球惑星化学」

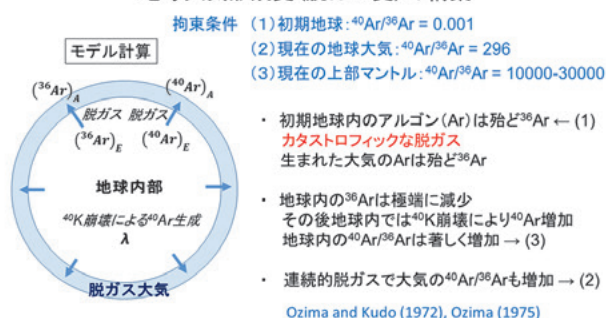
小嶋 稔 (おじま みのる)

東京大学名誉教授



希ガスの同位体分析を通じて「希ガスの地球惑星化学」という新しい分野の創設をリードした。特に現在の大気は大部分、地球誕生間もなく起きたカタストロフィックな脱ガスによるものとするモデルは、その後の大気と海洋の起源・進化論の基礎をなすものとなった。

地球大気形成史(脱ガス史)の構築



日本学士院賞

「既存建築物の耐震性能評価と性能改善技術の開発に関する一連の研究」

岡田 恒男 (おかだ つねお)

東京大学名誉教授、
(一財)日本建築防災協会顧問



建築物の耐震性能を一貫して表現できる指標を開発し、これにより新築建物の耐震設計法、既存建築物の耐震診断法、耐震補強のための耐震改修方法などが急速に推進され、日本を始め多くの震災国での地震対策に採用されている。

既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準

耐震性能を構造耐震指標(I_s)で評価

$$I_s = E_o \times S_o \times T$$

E_o : 構造性能基本指標

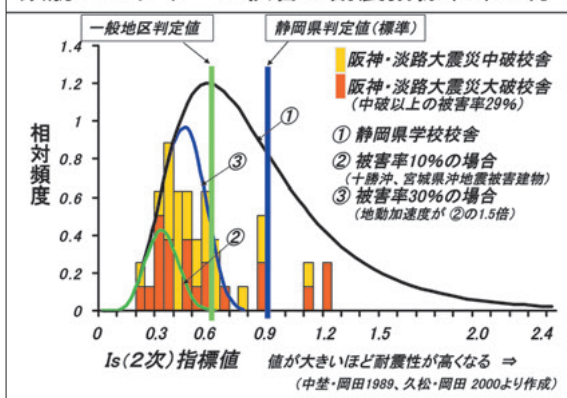
強度指標(G)、靱性指標(F)より算定

S_o : 形状指標 (0.4~1.2)

T : 経年指標 (0.5~1.0)

$I_s \geq 0.6$: 地震時に倒壊・崩壊する危険性が低い

鉄筋コンクリート校舎の耐震指標(I_s)の分布



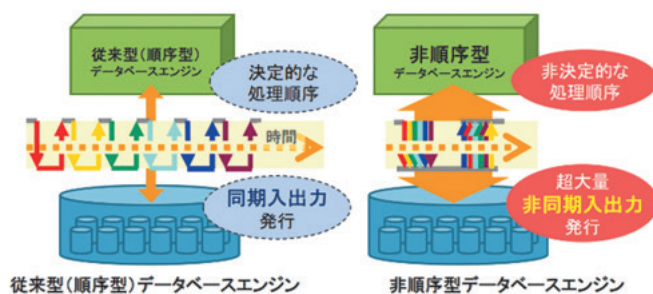
日本学士院賞

「大規模高性能データベースシステムの理論と応用に関する先駆的研究」

喜連川 優（きつれがわ まさる）
国立情報学研究所長、東京大学生産技術研究所教授



世界的に使われるようになっているビッグデータなどのデータベースの高速処理技術の基礎である非順序型データベース演算実行形式を確立し、実用化した。さらに、医療や地球環境の膨大な蓄積データ及び解析手法を世界の関係者に提供している。



日本学士院賞

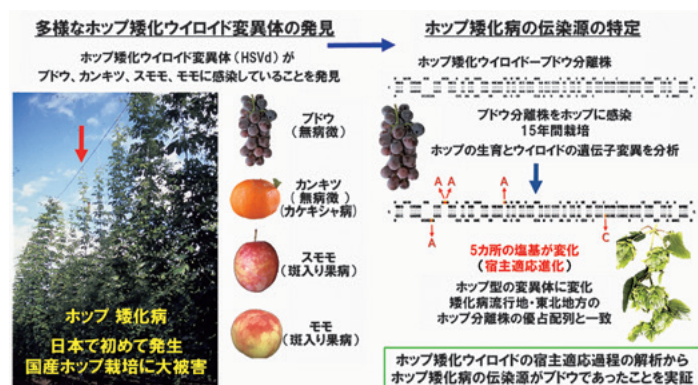
「ウイルスに関する研究」

佐野 輝男（さの てるお）

弘前大学農学生命科学部教授、
岩手大学大学院連合農学研究科主
指導教員



最小の自律複製病原遺伝子であるウイルスの研究を総合的に展開し、ホップ矮化病の伝染源の特定、国内の作物と果樹のウイルス病の全容、ウイルスの多様性と分子進化、病原性を解明し、診断と防除に貢献した。



日本学士院賞

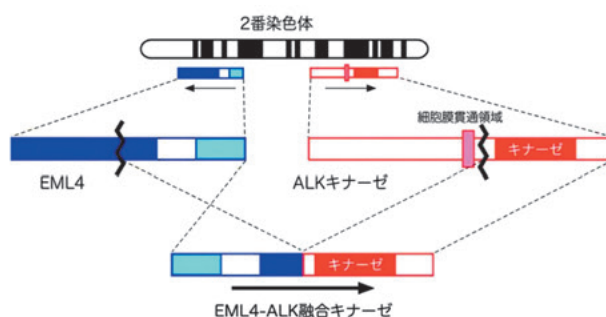
「EML4-ALK がん遺伝子の発見とがんゲノム医療の先導」

間野 博行（まの ひろゆき）

国立がん研究センター研究所長、国
立がん研究センターがんゲノム情報
管理センター長



肺がんにおける初めての融合型がん遺伝子 EML4-ALK を発見し、同遺伝子陽性患者に有効な抗がん剤をもたらした。また、同様な異常 ALK 遺伝子によって生じるがん種全体を ALKoma と提唱し、腫瘍のゲノム情報によって治療薬を選択するがんゲノム医療を導いた。



ヒト 2 番染色体上に EML4 遺伝子と ALK 遺伝子は互いに反対向きに存在しているが、両遺伝子を挟む染色体領域がひっくり返ってつながる（逆位）ことにより、EML4-ALK 融合遺伝子が生じる。その結果、強力な発がん能を有する EML4-ALK 融合キナーゼが産生される。

日本学士院エジンバラ公賞

「熱帯病原性微生物の生存および拡散戦略の解明—寄生虫の多様な環境適応機構—」

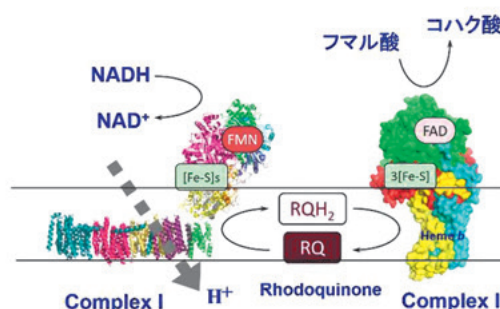
北 潔 (きた きよし)

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科長・教授、
東京大学名誉教授



細菌から寄生虫、そしてがん細胞におよぶ多様な呼吸鎖電子伝達系による低酸素適応機構を解明し、生物におけるエネルギー代謝やオルガネラの進化、そして呼吸鎖電子伝達系の薬剤標的としての意義を明確にした。

抗寄生虫薬・抗がん剤の標的としてのフマル酸呼吸



新客員選定

令和元年 11 月 12 日開催の第 1133 回総会において、日本学士院法第 6 条に基づき、わが国における学術の発達に関し特別に功労のあった外国人としてアントワヌ・コンパニオン博士を新たに日本学士院客員に選定しました。



アントワヌ・コンパニオン
(Antoine COMPAGNON)

コレージュ・ド・フランス教授、
コロンビア大学教授
居住地 フランス共和国
専攻学科目 フランス文学、一般・
比較文学

アントワヌ・コンパニオン教授は、フランス文学、さらには一般・比較文学の分野において数多くの業績を挙げ、フランスのみならず世界の

文学研究を牽引する碩学であるが、同時に、学生時代に理工系の学問を深く学んだ経験を生かして、文学の社会的意義と価値を専門外の読者にも説得的に説き明かす知識人でもある。その研究対象は、テキストの批評校訂と個別作家の研究から文学史、批評と文学理論、文学と文化及び社会との関係についての考察に及ぶが、それを踏まえて、文学・思想における〈近代性〉に豊かな陰影と自由を与えたのが、進歩を単純に信奉する軽薄な近代主義に抵抗した〈アンチモダン〉の潮流であったことを明らかにした功績は大きい。教授はこれまで 8 回にわたって来日し、日本人研究者と緊密な研究協力を重ねているばかりでなく、少なからぬ数の日本人留学生を受け入れ、行き届いた指導によって博士論文の完成に導くなど、日本のフランス文学研究に対する貢献も著しい。

竹市雅俊会員がガードナー国際賞受賞

令和 2 年 3 月 31 日、第 4 分科の竹市雅俊会員（発生生物学・細胞生物学専攻）が、ドイツの Rolf Kemler 博士とともに、カナダのガードナー財団よりガードナー国際賞を 10 月に受賞することが発表されました。受賞理由

は「動物細胞の細胞接着とシグナル伝達を担うタンパク質カドヘリンおよび結合タンパク質の発見とその分子メカニズムの解明」です。

講演会レポート

本院主催により、以下の講演会を開催しました。

1. 第 71 回公開講演会

開催日 令和元年 10 月 26 日 (土)

会 場 日本学士院会館

揖斐 高会員が「蕪村俳句の魅力—その空間表現と時間意識—」、関谷剛男会員が「がんゲノム：がんがで

きるわけ、そしてがんとの闘い」と題して講演を行いました。揖斐会員は、代表的な江戸時代の俳人である与謝蕪村について、客観的描写（空間表現）や郷愁（時間意識）という視点から、様々な句を紹介しながら解説しました。また、関谷剛男会員は、がん克服への道は、「できなければ良い」「治すことができれば良い」「死ななければ良

い」の三段階であるとした上で、ゲノムの変異とがんの関係性や、がんゲノム医療の将来について、図表を示しながら説明しました。聴講者からは、揖斐会員の講演に対し「画家でもあった蕪村の句を新鮮な切り口で解説してくださり、面白かった。」「時間意識の説明が良かった。」「新たな蕪村の一面、人間像を理解できた。」、関谷会員の講演に対し、「がんの休眠を保ち、共に生きることで寿命を延ばすという主題をよく理解できた。」「がんの再発についての話がわかりやすかった。」「日常生活でがんになる要因に取り囲まれているとわかった。」などの意見が寄せられました。



揖斐 高会員



関谷剛男会員

2. 学びのススメシリーズ講演会

「脳のメモ帳の不思議 ―ワーキングメモリの探検―」

開催日 令和元年 12 月 21 日 (土)

会 場 日本学士院会館

講師の荻阪直行会員は、新たな知識を覚えたり暗算をするときに使われるワーキングメモリと呼ばれる、いわ

ば脳のメモ帳とも言われる領域について、参加者のワーキングメモリを試す実験を含めながら、その仕組みを解説しました。

聴講者からは、「物忘れをする脳の仕組みが実験を通じてよくわかり、面白かった。」「普段自分が使っている脳について知らないことがあり、とても新鮮だった。」「中学生の自分はワーキングメモリが発達するのに適している年齢だと気付かされた。今この時を大切にたくさん勉強しようという気力が湧いてきた。」「心理学は文系の学問だと思っていたが、サイエンスとしての姿を知り、興味がわいた。」「試験等で勉強する際、短期記憶に頼って勉強しているのだとしみじみ思い、講演を聞きながら長期記憶の大切さを感じた。」「何かを記憶しようとする際、脳に記録を残そうとする働きのようなプラスの能力だけが使われていると思っていたが、脳において抑制する働き（マイナスの能力）が重要だという話が意外だった。」「自分たち高校生は今はワーキングメモリの発達のピークであるため、スマホに頼らないで生活することが大事だとわかった。」「いわゆる「体が覚えている」という状況は脳の記憶する機能とは別のものなのかなど、脳以外がどのように記憶に関わるかが気になる。」などの意見が寄せられました。



心理学の実験を行う荻阪直行会員



実験に参加し手を挙げる聴講者

第 16 回日本学士院学術奨励賞

令和 2 年 1 月 14 日開催の第 1135 回総会において、第 16 回日本学士院学術奨励賞の受賞者 6 名を決定しました。2 月 18 日には秋篠宮皇嗣同妃両殿下ご臨席のもと、日本学術振興会賞と同時に授賞式を挙行了しました。



「実時間量子散逸系理論の構築とその
光合成初期過程解明への応用」

石崎 章仁（いしざき あきひと）

自然科学研究機構分子科学研究所教授

生命科学の基礎ともなる生体高分子ダイナミクスを理解するため量子力学に分子環境の効果を取り込んだ理論を構築し、光合成の初期過程における電子エネルギー移動やエネルギー変換過程の理論的解明に挑戦している。



「ゲノム編集ツール CRISPR-Cas9 の構
造機能研究」

西増 弘志（にしまつ ひろし）

東京大学大学院理学系研究科准教授

ゲノム編集ツール CRISPR-Cas9 の構造解析を行い、Cas9 が標的 DNA を切断する仕組みを世界に先駆け解明した。Cas9 の構造情報はゲノム編集技術の理解および改良に大きく貢献してきた。



「ビッグデータと高次元データ解析にお
ける統計理論研究」

加藤 賢悟（かとう けんご）

コーネル大学統計学データサイエンス
学科准教授

統計学・計量経済学、特に分位点回帰分析、ノンパラメトリック推定、高次元統計解析などの分野で、先進的な理論研究を多数行ってきた。その仕事は、数学的に緻密でありつつ、様々な実証分析への応用が可能であり、国際的にも影響力が大きい。



「植物の光受容体フィトクロムによる
遺伝子発現の多段階制御機構の解明」

松下 智直（まつした ともなお）

九州大学大学院農学研究院准教授

植物などに存在し、数多くの生理反応を制御している光受容体フィトクロムのシグナル伝達機能を追求し、転写開始点やスプライシングを制御する新規の遺伝子発現機構を明らかにした。



「石刻資料の網羅的収集に基づく中国
六朝隋唐仏教史の再構築」

倉本 尚徳（くらもと ひさのり）

京都大学人文科学研究所准教授、東洋
大学東洋学研究所客員研究員

5 世紀（北魏）から 9 世紀（唐代）の中国仏教思想史を、膨大な量の新出土石刻資料を解説することで、時代と地域で異なる仏教信仰の多様性と独自性を明らかにした。緻密な分類手法は、国際的に高い評価を得ている。



「非芳香族化を活用した新規有機合成
反応の創出」

依光 英樹（よしみつ ひでき）

京都大学大学院理学研究科教授

「芳香族骨格は頑丈で壊れない」という有機化学の常識を覆す芳香族骨格変換法や、金属触媒を使わずに芳香族性の破壊を利用する全く原理の異なる芳香環連結法を確立し、その成果は医薬、農薬化学を含む有機化学全体に波及している。

「中国北朝時代における造像流行の背景にあるもの」 京都大学人文科学研究所准教授 倉本 尚徳

私は中国の南北朝から隋唐時代の仏像に刻まれた銘文を網羅的に蒐集し、仏教史の立場から研究を行っている。今まで約20年にわたって毎年のように中国を訪問し、石仏を捜し求めてあちこち歩きまわってきたが、とりわけ数が多いのは五世紀後半から六世紀にかけての北朝時代後半期のものである。その地理的分布は広汎で、都市寺院だけではなく、当時の交通路沿いや地方の村落、人里離れた山の頂近くにも存在する。

なぜこれほど広汎に普及したのであろうか。その原因の一つが、鮮卑という遊牧異民族の樹立した北魏王朝が仏教を利用した人民の教化政策を採用したことである。この時代の仏教・道教の概要を記した『魏書』釈老志には、太宗（在位409～423）の時代、「都でも地方でも仏塔や仏像を建立し、僧に人民の風俗を指導教化させた。」と記されている。そうした僧の教化の場となったのが、人々が造像や齋会を行うため自主的に結成した義邑などと呼ばれる宗教結社である。義邑によって造られた仏像には、老若男女の供養者の名がところ狭しと刻まれている

ものが多い。これ以前、一般庶民が地上に名を残すというのは非常に困難であった。まして女性ならなおさらである。義邑には女性限定の団体もある。造像という活動は、自分の名を後世に残すという機会を中国史上はじめて男女含めた広汎な人々に提供した。

拙著『北朝仏教造像銘研究』（法藏館、2016年）において明らかにしたのは、「禪師」と呼ばれる実践修行を重視する僧たちが、翻訳経典だけではなく、実践的性格の強い中国で撰述された経典（偽経）を自在に利用して義邑を教化する姿であった。義邑は地域的差異が濃厚である。曇鸞・慧思・慧可など、日本の禅宗や天台、浄土教につながる中国の祖師たちもこの時代に生をうけた。王朝による廃仏という苦難を幾度も乗り越えながら、現在までその法脈が続く多様な独自の思想・実践体系がこの時代に生み出されたのは、異民族や女性も含め、地方の村落まで及ぶ広汎な階層の人々の支持を獲得できたからであろう。今後も伝世史料に現れない人々の姿を明らかにすることに努力していきたい。

「はざまの楽しみ—量子と古典、物理と生物」 自然科学研究機構分子科学研究所教授 石崎 章仁

娘が生後6ヶ月のころ絵本 Quantum Physics for Babies を無邪気に喜ぶ姿を見て「古典力学を知らないまま量子力学を理解した人の目にこの世界はどう映のだろう」と妙なことを考えたことがありました。量子と古典の境目はどうなっているのだろう—そんな素朴な疑問について考えさせられる題材を分子科学に見出すことができます。電子や原子の振る舞いが量子力学抜きには説明できない一方で、タンパク質や細胞は古典的世界像で理解できる。時空スケールとして狭間にある分子の世界は、量子と古典の境界や関係性を探るうえで格好の研究対象となり得るのです。

タンパク質の中で起こる量子力学的現象は、膨大な数の動的自由度ゆえに生じる揺らぎや散逸の影響に曝されることで、その量子的性質は破壊され、あるいは頑健に維持されます。そのような現象の一つとして私は、光合成におけるエネルギーの輸送や変換の過程を調べてきました。光合成初期過程では太陽光エネルギーを細胞が利用可能な化学エネルギーに変換するために、吸収したエネルギーを適切な部位まで輸送する必要があり、その効

率は驚異的に高いと考えられています。エネルギーは量子力学にしたがって複数の分子に非局在化しようとする一方で、タンパク質が誘起する揺らぎは局在化させようとします。分光実験グループとの密な連携による私どもの理論研究は、天然光合成における動的現象が量子的性質の維持と崩壊のせめぎ合いと絶妙なバランスを利用して最適化されていることを明らかにし、光合成の物理化学や生物物理学に加えて量子物理学など周辺分野にインパクトを与えることとなりました。

さらに近年は、生体系における動的過程がさほど大きなエネルギーの授受もなしに一方向的に起こり得るのは何故だろう？という素朴な疑問に駆り立てられ、分子物質系の非相反現象や機能発現およびその量子計測に関する新たな研究を展開しています。今回いただきました学術奨励賞は、学問の垣根にさほど拘らない私の研究スタイルを鼓吹していただいたものと大きな励みになっております。今後もいただきました賞の名に恥じぬ様より一層の精進を重ねてまいる所存でございます。

日本学士院学術奨励賞・日本学術振興会賞授賞式（令和2年2月18日）



選考経過を報告する斎藤 修委員長



賞状及び賞牌を授与される受賞者（倉本尚徳氏）



受賞者を代表して挨拶を行う松下智直氏



式後、受賞者と懇談する秋篠宮皇嗣同妃両殿下

国際学士院連合第90回総会

令和元年11月25日～29日まで、パリのフランス学士院を会場として、第90回国際学士院連合（UAI）総会が開催されました。総会には、本院からの代表で同連合の理事も務める佐藤彰一会員が出席しました。今回の総会は、大正8（1919）年にUAIが結成されてから100年目の節目に当たり、UAIの研究プロジェクトに関係する幾つもの国際研究集会が並行して行われるなど、関連の行事も行われました。

11月25日には、開会総会が行われ、UAIのサミュエル・リュウ会長の挨拶及び主催アカデミーであるフランス碑文・美文アカデミーのミシェル・ザンク終身書記、フランス精神・政治科学アカデミーのジャン＝ロベール・ピット終身書記が挨拶を述べました。選挙などの手続きの後、スウェーデン・アカデミーのトルビヨン・ローデンUAI理事が「中国文化と西洋文化」と題して、ウィーン・アカデミーのミハエル・アルラムUAI理事が「コンテキストの中の貨幣—インド・イラン国境地帯のケース・スタディ」と題して、ドイツ連邦・アカデミーのクラウス・ヘルバースUAI副会長が「歴史学の未来と対峙する。中世における予知」と題してそれぞれ講演を行いました。午後は92を数えるUAIのプロジェクトの2年次評価が行われました。

26日は、昨日2年次評価が行われたものを除くプロジェクトについて、6年次評価が行われました。日本学

士院が大正11（1922）年に提案し採択され、現在も東京大学史料編纂所に委嘱して継続中である第7研究プロジェクト「在外未刊行日本関係史料」出版事業は、「エクセレント」の評価を得ました。また、佐藤会員は、6年次評価の一部のセッションについて、司会を務めました。午後からは新規プロジェクト候補2件のプレゼンテーションが行われ、上記の第7プロジェクト以来約100年ぶりに日本学士院が提案した「日本古貨幣目録」について、佐藤会員が説明を行いました。

27日は上述のサテライト行事に充てられ、午前第5研究プロジェクト「中世ラテン語辞典」に関する研究集会が「デジタル時代における方法論的考察」をテーマとしてフランス学士院を会場に開かれました。夕方にはルーブル美術館で展示されている第1研究プロジェクト「古代甕瓶集成」に関する展覧会「諸民族の平和のための科学と美術：Corpus Vasorum Antiquiorumの創造」について専門家による案内がありました。なおこのプロジェクトに関して「ミレトス陶器と類縁関係にある古典期陶器」と題する国際関係集会が、27・28日にかけてルーブル美術館を会場に行われました。この他に第75研究プロジェクト「ローマ教皇書簡集成」に関連して、パリ所在のドイツ歴史研究所において、「教皇文書：研究の宝庫」と題する国際研究集会が同じく27・28日の両日にわたって開催されました。

28日は、フランス学士院内に新たに建設された大講堂で「UAI創設100周年記念」セレモニーが行われま

した。サミュエル・リコ会長の挨拶に続いて、ブリュッセル自由大学教授ケネス・パートラム教授が「国際学士院連合：戦間期科学外交の実験室」と題して、オックスフォード大学ニコラス・クロンク教授が「デジタル時代の「全集」の理念を問う：ヴォルテール全集の事例」と題して、それぞれ講演を行ないました。その後、「我々はどこから来たか。我々は何者か。我々はどこに向かおうとしているか」と題して、元 UAI 会長のマデリン・キャヴィネス米国代表を進行役とする円卓会議が行われました。これに続いてニコライ・マカロフ・ロシア科学アカデミー会員による「新たな挑戦の時代における考古学」と題する講演が行われました。100 周年記念事業として新たに設けられた若手研究者賞は、オーストラリアのマッコレー大学のロニカ・パワー博士と、ベルギーのブリュッセル自由大学のヨアニス・シャラゾニティス博士に授与されました。

29 日は、閉会セッションが行われ、新規プロジェクトについて、日本学士院提案の「日本古貨幣目録」がベルギー王立アカデミー提案の「初期フランドル派絵画」とともに採択されました。午後には碑文・美文アカデミーの定例盛儀がフランス学士院穹窿会場（クーポール）で行われました。今回は英国の王立協会とともに UAI 創設の旗振り役を務めた碑文・美文アカデミーが主催者であるため、同アカデミーの定例盛儀が UAI 総会と連携して行われました。参列者には各国大使や軍人も含まれ、また UAI 代表も全員が招待されました。フランス共和国儀

仗兵の鼓笛隊の太鼓の音を合図に、抜刀した儀仗兵の栄誉礼を受けつつ碑文・美文アカデミー会員、外国人客員会員、連携会員が入場着席し、ミシェル・ザンク同アカデミー終身書記の演説で開式しました。フランス学士院の穹窿会場での演説は古くからの伝統として、フランス語に限られ、演者はフランス学士院の制服の着用が義務付けられます。この制服着用を許される碑文・美文アカデミーの客員会員 3 名に同アカデミーの日本学者ジャン＝ノエル・ロベール院長がこれに加わり各々 15 分の演説を行いました。最初に元 UAI 会長でスイス・アカデミー代表のアゴスティーノ・パラヴィチーニ＝バリアリ氏が、「各世界の中世」と題して、UAI の研究プロジェクトで中世に関する諸プロジェクトを通観して、その意義を説く演説を行い、続いて UAI 前理事で英国学士院会員のニコラス・シムズ＝ウィリアムズ氏が「国境を越えた科学的知見：過去と現在」と題して、同氏が専門とするイラン学研究の国際的広がりについて論じ、佐藤会員は、「明治期日本における西洋史理念」と題して、明治期以後の日本における「西洋史」という学問がどのような性格を具えていたかを論じました。ジャン＝ノエル・ロベール院長の演説は「2 つの文献学の合流：日本・フランス共同の仏教百科事典『法華義林』」をテーマとして行われました。

なお次回の第 91 回総会は 2021 年に米国のフィラデルフィアで開催予定です。



UAI 第 90 回総会出席者



閉会セッションでの役員選挙



UAI 創設 100 周年記念セレモニーで挨拶するディディエ・ヴィヴィエ UAI 事務局長



フランス碑文・美文アカデミーの定例盛儀で演説を行う佐藤彰一会員

(会員寄稿)

自著の英語訳出版について

川本 皓嗣 会員
(比較文学専攻)

自分の本の外国語版が出るとき、出そうというときは、どういう点に意を用いるべきか。学士院の会員諸氏は、こういう問題はとくに卒業しておられるかもしれない。ことに第二部の方々にとって、それは格別珍しいことでもないだろう。ここでとくに考えてみたいのは、人文・社会科学書の、それも差し当たっては英語への翻訳のことだが、これについても多くの方が、すでに豊富な実績と見識をそなえておられるに違いない。私が口をさしはさむ余地などなさそうだが、あえて愚見を申し述べるのは、直接・間接に何度かこの種の仕事に関わった体験から具体的に学んだこと、考えたことが、少しでもお役に立てば嬉しいと思うからだ（もちろんわが学士院には、独力で堂々たる外国語の著書を世に問うている達人が何人もおられることは、重々承知している。だがそういう方々は、日本ではあくまで稀有な例外だ）。

個々の短い論文ならば、自分で英文を書き、ネイティヴ・チェックを受けるのがふつうだろう。だが一冊の著書ともなると、誰かに依頼するか、自分で訳するか（つまりは自分で書くか）、決断しなければならない。その場合、これはあくまで私見だが、もしあれこれ迷うのであれば、相当に手馴れた英語の書き手を自認するのでない限り、よくできる方をお願いするほうが、結局は労力と成果の両面で良策ではないか。なぜなら、内容が何であれ、それを論じる英語の文体が読みやすい（よくこなれて風格があり、きちんと筋が通って正確な）ものでなければ、欧米の読者は決してついて来てくれないからだ。ネイティヴ・チェックも、文体にまでは手が及ばない。

その点で信頼できる訳者候補としては、自分と専門が同じで内容に理解のある高度の英語の書き手、つまり名だたる大学の博士課程の学生か、博士号を取得して間もない若手あたりが理想的だ。ことにアメリカなどでは、翻訳が大した業績にはならないので、既に声価の定まった大先生は、たいていやる気もなければ暇もない。だがその先生とよく相談すれば、教え子たちの中から、翻訳を承知してくれるいい若手が見つかるかもしれない。

昭和14年大阪府生まれ。東京大学教養学部教養学科卒業、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。東京大学教養学部教授・東京大学大学院総合文化研究科教授・帝塚山学院大学人間文化学部教授・大手前大学学長を歴任。東京大学名誉教授・大手前大学名誉教授。平成21年より日本学士院会員。小泉八雲賞、サントリー学芸賞、瑞宝重光章受賞・受章。近著に『俳諧の詩学』（岩波書店）。



ただし優秀な訳者が引き受けてくれて、文体の問題が一応解決したからといって、まだこちらの仕事が終わるわけではない。たぶん一章ごとに送られてくる訳稿を、原著者は最大限の注意を込めて、初めからじっくり読み通さねばならない。読んでいくうちには何度か、自分はこんなことを言った覚えがない、言うはずがないと驚いたり、また自分の言い方とはかなりニュアンスが違うのではと怪訝に思ったりする箇所に行き当たり、その度に原文と訳文を綿密に突き合わせる必要に迫られるはずだ。

それは事によれば、何気なく用いた日本語の古風な常套句やひねった言い回し（反語など）が、正反対の意味に受け取られているのかもしれない。その場合は、自分の言いたいことをできるだけ正確に英語で作文して、訳者の参考に供する必要がある（日本語で説明すると、また誤訳される恐れがある）。また事によれば、それは日本語と英語との語順の違いのせいで、原文では段落の末尾にあって次の段落へのきっかけになるはずだった語句が、訳文では段落の中ほどに移された結果、段落間の連絡が途切れ、そこに唐突な飛躍や断絶が生じているのかもしれない。訳書の読者の立場から見れば、二つの段落がすんなり順接するか、にわかに逆接するか、両者の連接関係の見やすさこそが、スムーズな読み取りにつながる急所の一つなのだ。この点にはべつに決まった解決法がなく、その場その場で手当てを工夫する他はない。訳者がどれほど優れていようと、翻訳ではこうした大小の手違いが避けられないので、訳文を自分で確かめる労を省くのは危ないことだ（むろん稀には例外もある）。

文体上の不備はもちろん、上記のような行文上の矛盾や亀裂がわずかに数か所あるだけで、読者がその本を途中で投げ出す確率はぐっと高くなる。言うまでもなく、仕上りの良し悪しは英文の上にはしか表われないので、それが日本でとくに注目されることはめったにない。だが例えば、同じ本の評価が日本と欧米で大きく食い違ったるとき、そうした不可解な現象の背後には、しばしば訳文の質の問題がからんでいるのではないだろうか。

日本学士院は、明治6（1873）年に結成された近代的啓蒙学術団体である明六社を源流として明治12（1879）年に創設された東京学士会院を前身とします。東京学士会院は、明治39（1906）年に帝国学士院に改組し、昭和31（1956）年に現在の日本学士院となりました。このコーナーでは、140年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介いたします。

明治45（1912）年3月に発刊した帝国学士院紀事（Proceedings of the Imperial Academy）は、創刊より不定期に刊行されたが、大正7（1918）年に第1巻第5号が刊行されて以降は刊行が途絶えていた。その後、大正13（1924）年にいたって復活の議が起こって紀事及び別冊出版委員が選定され、同年6月に開催された臨時総会で、次のような報告が行われた。「本院が学術上の新研究、新発見等の優先権を保護すると同時に本院紀事を是等学術上の新研究、新発見の発表機関とせば本院紀事として最も意義あるものとなる（中略）其の方法としては国内に於ける学術上の新研究、新発見の概要の発表を本院に於て統一することとし、其の発表せられたるものは直に約二頁以内の英文として本院紀事に登載し之を各国の学会、研究所等に発送することとしたし。斯くすれば材料も十分集り又本院紀事として相当価値あるものとなるべしとのことに各委員の意見一致せるを以て之に要する予算を請求すべきことに決定せり。」この計画に基づき準備が進められ、大正14（1925）年4月の総会には新計画の趣意書を各大学・学会に送付すべく、また同年度の予算も無事通過した旨櫻井錠二委員長より報告が行われ、穂積陳重院長からも本出版計画は本院が学問の中核機関としての職能を全うするために速やかに実行に着手することにしたいとの発言があった。

同年6月12日の東京朝日新聞には、「ばかを見ていた日本の学界—新研究の優先権は世界的に争うべく 学士院の発表機関創立」として、次のような記事が掲載された。「従来我国の学者の新発見や新研究が日本語という外国には通用せぬ語学にたたられ、又適当な対外発表機関がなかったためむざむざ外国学者にお株を奪われて後でいくら力んでもどうにもならぬことがしきりと出て来た」「鈴木梅太郎博士のビタミンも一年も出し抜いたにかかわらず外国に優先権を奪われた、之等の事実が相つぐのにかんがみ」「学士院を新学説、新発見の一種

の「登記所」の様に改め新研究の概要はそこへ届けてその上でそれぞれ詳細を専門的の会議で発表する様な方法をとろうということになった」「然して大蔵省でも学士院本年度の新事業費の多くははねつけたがこの刊行物の予算にはむしろ喜んで賛同を与えたという。」

新生なった帝国学士院紀事は、大正15（1926）年以降、毎年10回発行することとなり、最初に発行された第2巻第1号には藤原松三郎会員（数学）の「有理数に依る無理数の近似」（英語の原題を和訳）のほか14編の論文が掲載され、その後も順調に発行が続けられた。

一方、人文科学方面の発表には内容上日本語により発表することが適当とするものが多い関係から、日本語で研究発表を行うための媒体が必要となった。そこで、昭和16（1941）年7月、出版委員に第1部会員の増員を行い、体裁、発行回数などを議し、日本文の紀事の編集主任に姉崎正治会員を選任した。かくして、同年10月の出版委員会を経て、同月の総会で邦文の『帝国学士院紀事』が発刊されることとなった。第1巻第1号は昭和17（1942）年に発刊され、冒頭には「本院出版事業経過概略と本院紀事発行趣旨」が掲載された。そこには「本邦学界の新研究新発見等に関する報告の発表機関として、従来の欧文紀事は、自然科学方面に偏し易く、之に反して人文科学に属する分、殊に本邦の歴史文物等に関するものは邦文を以て発表するを適当とすること多く、又自然科学方面にても邦文にて発表せらるるものあるべきを以て、本邦学術の進境を標示する一機関として、本紀事を発行して此等邦文報告を収載するは、元来本院の使命上必須の事業なりしが、今漸くその緒につきて茲に初号の発行を見るに至りしものなり」と記された。第1巻第1号には、総会の記事や彙報（本院の活動報告）のほか、姉崎正治会員の「三経義疏に参照して十七條憲法の意義内容」などの論文を掲載した。

総会における論文の発表及び紀要の発行は、第2次大戦下においても継続された。昭和22（1947）年に帝国学士院が日本学士院に改称されると、Proceedings of the Imperial Academy は Proceedings of the Japan Academy に、帝國學士院紀事は日本學士院紀要に改称された。

戦争末期及び終戦直後に、物資の欠乏、印刷所の焼失などの諸事情のため、2・3年間その発行が遅れをみるに至ったことがあるが、それも昭和23（1948）年には戦後の困難な状況を克服して発行に努め、発行遅延期間に例会で発表された研究全部の発行を完了し、昭和25

(1950) 年 5 月からは元通り発行されるようになった。

論文の報告については、講堂に第 1 部・第 2 部会員が一同に会して行われていたが、第 2 部の報告が主であったことから、第 1 部の報告を充実させるため、昭和 37 年 4 月からは、各部の報告を分かれて行うこととなった。ただし、第 1 部・第 2 部それぞれどちらの論文報告を聞いても良いこととした。今でも、時として他部の報告に参加する会員がみられる。

昭和 40 (1965) 年以降、わが国の学術研究の発展がめざましく年々その発表論文が増加したので、昭和 53 (1978) 年 4 月以降は Proceedings を Ser. A (Mathematical Sciences) と Ser. B (Physical and Biological Sciences) に分けて発行することとした。

その後、多数の英文学術誌が発刊されたことにより相対的に Ser. B 誌の存在が埋没したため、平成 12 (2000) 年頃より山川民夫 Editor-in-Chief を中心に改革が進められ、原著論文と並ぶ柱としての総説論文の掲載、ピア・レビュー（審査）の厳格化、表紙への写真・図の掲載、オンライン公開、PubMed への収録などの改善策が次々と実施されている。

〔コラム〕スペイン・インフルエンザの帝国学士院への影響

世界中で新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっているが、大正時代にも大規模な感染症が流行した。昨年亡くなった速水 融会員の著書『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ——人類とウイルスの第一次世界戦争』（藤原書店、平成 18 年）には、その様子が克明に紹介されている。同書からの長い引用により紹介する。

「スペイン・インフルエンザ来襲を、帝国学士院（当時）は院長・穂積陳重）会員も免れることはできなかった。（中略）インフルエンザ流行以前の大正 7 (1918) 年 5 月、6 月頃は、総会への出席率は 75 パーセント以上であったのが、7 月以降は 50 パーセント前後に減り、40 パーセント以下になる時もあった。やはりインフルエンザ流行時に、自身や家族が罹患したか、外出を避けたためであろう。

インフルエンザによる物故会員は大正 7 (1918) 年 12 月 21 日に亡くなった中島力造会員一人であったと思われる。（中略）61 歳であった。（中略）当時、日本の哲学界は京都大学において西田幾多郎教授を中心とする「京都学派」が誕生しつつあり、東京大学にとって中島教授の急逝は痛手であったに違いない。

なお、大正 8 (1919) 年 12 月の例会の模様を、『読売新聞』（15 日付）が伝えている。当時 12 月は納会だったようである。（中略）出席は定員の 4 割という寂しい

納会であったが、記事をのぞいてみよう。

学士院も『（前略）時節柄大分感冒に煩わされた向きが多かった。古市公威博士（工学）は純粹の病氣だが、感冒欠席の学者は櫻井錠二（化学）、上田萬年（言語学）、岡松参太郎（民法）、石川千代松（動物学）、一木喜徳郎（憲法）等の諸博士お歴々が大分倒れてゐる。顔を見せた人でも長井長義博士（薬学）は熱が出て直に帰る。松村任三博士（薬学）や芳賀矢一博士（国文学）も鼻をぐずぐず鳴して嚏（くしゃみ）のし続けである。（中略）用心深い土方寧博士（民法）は「ビーヒナット」という感冒予防の錠剤を時々出して口に入れる。芳賀博士や小藤文次郎（理学）博士にも一つ宛分配してその効能を説いて唯一人上機嫌（後略）』。スペイン・インフルエンザ流行下の学士院納会の状況が伝わってくる。」(361～364 頁)

第 27 代日本学士院長に 井村裕夫会員

令和元年 10 月 15 日開催の第 1132 回総会において、新たに井村裕夫会員を院長に選定しました。任期は 3 年です。井村会員は、平成 6 年に会員に選定され、第 2 部第 7 分科に所属。専門分野は内科学で、神戸大学医学部教授、京都大学医学部教授、医学部長、総長、総合科学技術会議議員、財団法人先端医療振興財団理事長を歴任。平成 30 年 5 月より本院幹事を務めていました。

井村会員は、ストレスホルモンである副腎皮質刺激ホルモンの生合成、分泌の機構を明らかにしました。また、脳内活性物質の内分泌調節における役割の解明、視床下部・下垂体疾患の診断法の確立に貢献し、新しい疾患を発見しました。このように神経内分泌学の発展に大きい役割を果たすとともに、心臓ホルモン、膵消化管ホルモンなど内分泌学の新分野の開拓にも貢献しました。

新幹事の選定

井村裕夫幹事の院長選定に伴い、令和 2 年 2 月 12 日に幹事の補欠選挙を行い、西尾 勝会員が選定されました。西尾会員は第 1 部第 2 分科所属で専攻は行政学。平成 19 年に会員に選定され、現在は東京大学名誉教授です。



新会員選定

令和元年12月12日開催の第1134回総会において、日本学士院法第3条に基づき、次の7名を新たに日本学士院会員として選定しました。



井上 正仁 (いのうえ まさひと)

第1部第2分科

専門分野：刑事訴訟法

現職：東京大学名誉教授、法務省特別顧問

刑事手続における捜査・証拠に関する先端的問題を中心に、関連する法規・制度の沿革や基本にある法原則にまで遡り、外国法制に関する幅広い識見を活かしつつ、独自の視角から掘り下げた考察を加えて合理的解決を導くとともに、それを踏まえて精緻で実際性をも兼ね備えた新たな理論体系を構築し、学界のみならず立法や判例・実務に対しても大きな影響を与えた。



北川 進 (きたがわ すすむ)

第2部第4分科

専門分野：錯体化学

現職：京都大学高等研究院物質・細胞統合システム拠点長・特別教授

金属イオンと多配位性有機分子の結合を基に、ナノメートルの精度での構造の制御が可能な多孔性金属錯体を開発し、環境、エネルギー等の課題に関わる気体物質の安全貯蔵・輸送、選択分離、高効率化学変換を可能にした。



梶田 隆章 (かじた たかあき)

第2部第4分科

専門分野：宇宙線天文学

現職：東京大学宇宙線研究所長・教授、東京大学卓越教授、東京大学特別栄誉教授、東京大学次世代ニュートリノ科学連携研究機構長

地球を取り巻く大気中で作られたニュートリノが、観測装置（スーパーカミオカンデ）に到達するまでに、他の種類のニュートリノに変わること（ニュートリノ振動）を発見し、ニュートリノに質量があることを実験的に証明した。



榊 裕之 (さかき ひろゆき)

第2部第5分科

専門分野：半導体電子工学

現職：東京大学名誉教授、豊田工業大学名誉教授、学校法人トヨタ学園常務理事

半導体の超薄膜、量子細線・量子ドット構造における電子の量子効果とその素子応用の研究、とくに量子細線FET、量子ドットレーザー、量子ドット光検出器の発明などにより、ナノエレクトロニクスの発展に先駆的に貢献した。



笹月 健彦 (ささづき たけひこ)

第2部第7分科

専門分野：免疫遺伝学、人類遺伝学

現職：九州大学高等研究院特別主幹教授、国立国際医療センター名誉総長、九州大学名誉教授

ヒトの免疫応答は、HLAが支配していることを明らかにし、これが感染症や自己免疫疾患、アレルギー、移植片対宿主病などの免疫関連疾患の感受性・抵抗性の基盤であることを示し、複雑な疾病の病因解明と克服への道を拓いた。



垣添 忠生 (かきぞえ ただお)

第2部第7分科

専門分野：泌尿器科学

現職：(公財)日本対がん協会会長、国立がんセンター名誉総長

患者の腸を使って作製した新膀胱を尿道に吻合し、膀胱全摘除後も尿道から自然排尿が可能な術式を開発した。特に女性に対しては世界で初めてこの手術に成功し、患者の生活の質の著しい向上に寄与した。



藤吉 好則 (ふじよし よしのり)

第2部第7分科

専門分野：構造生理学

現職：東京医科歯科大学特別栄誉教授、京都大学名誉教授、(株)CeSPIA取締役

クライオ電子顕微鏡の開発を通して、解析が困難であった水チャネルやギャップ結合チャネル、タイト結合などの膜タンパク質の構造生理学的研究により、医学や薬学、生命科学の発展に貢献している。

『学問の山なみ』から—歴史をつくった会員—

140年を超える学士院の歴史の中で、500名以上の会員が選ばれました。このコーナーでは、物故会員追悼の辞を集めた『学問の山なみ』から毎回2名を紹介します。

坪井 忠二 つばい ちゅうじ

明治8(1875)年—昭和57(1982)年

昭和35(1960)年日本学士院会員選定



東京府生まれ。学者の家系に生まれる。父正五郎は有名な人類学者であり、岩石学者の兄誠太郎とともに日本学士院会員であった。兄弟ともに第二部長を務め、忠二は幹事も務めた。第一高等学校を経て東京帝国大学に進み、大正15(1926)年、理学部物理学科を卒業した。卒業後は東京帝国大学地震研究所に入り、昭和3(1928)年助教授、同16(1941)年教授となり、同18(1943)年からは理学部地球物理学の第二講座を担当した。同38(1963)年の退官までの38年間を東京大学において地球物理学、特に地震学・測地学の研究・教育に専念し、多くの貴重な研究を発表するとともに、門下より多数の俊秀を輩出した。

坪井は、地殻変動の実態を調査し地震との関係を求め、地震予知に最も重要な地殻変動による地震発生の前兆把握の基盤を与えた。また、地震エネルギーの蓄積と放出

についての機構、地震のマグニチュードを推定する方式、地震エネルギーの上限値などの研究は学界に高く評価された。中でも最も重要なものは、重力の研究である。重力測定のための振子、短波通信を利用する重力測定法を研究開発し、重力異常から地下構造を推定する理論を発展させ、地殻の厚さや地震の震度分布を推定、重力異常と地震の発生する地域との関係を精しく研究した。日本全国に亘る精密な重力測定を行い、地質構造と重力異常との関係を明らかにし、日本で初めて重力異常分布図を完成させ、昭和27(1952)年には日本学士院賞が授与された。坪井は地震の災害防止にも意を注ぎ、昭和36(1961)年に地震学会が地震予知研究計画グループを結成した際には、世話人の一人となり、翌37(1962)年には「地震予知研究計画書」を出した。

語学が堪能であった坪井は、国際会議における司会や研究発表を流暢な英語で披露した。退官後は、持論である「語学を通じて国際理解の増進」を実現すべく語学教育に情熱を傾けた。万事に洗練されたマナーを身につけ、明快な話術で人を魅了した。師の寺田寅彦の学風を受け継ぎ、学問に対し常に厳しい態度で挑んだ。「自然の本性をつきとめることが大切であって、精密な機器も、難しい数理も、要はそのための方法である」との口癖にはその精神が現れている。

松山 基範 まつやま もとのり

明治17(1884)年—昭和33(1958)年

昭和25(1950)年日本学士院会員選定



大分県生まれ。旧姓墨江。広島高等師範学校を経て京都帝国大学に進み、明治44年(1911)年、物理学科を卒業した。卒業後は大学院に進み、英米に留学し理論地質学を究めた。大正5(1916)年、同大助教授となり、同8(1919)年より同10

(1921)年まで米国シカゴ大学に留学した。帰朝後の大正11(1922)年に京都帝国大学教授となり、理学部に新設された地質学鉱物学科の地質第一講座を担当、理論地質学を創設し、地質学と地球物理学の中間領域の研究に着手した。昭和19(1944)年の退官までの22年間を同大学において後進の教育に専心しつつ、多くの貴重な研究を発表、学界に新天地を拓いた。昭和24(1949)年に山口大学が創設されると初代学長となった。

松山の研究は地殻潮汐に始まり、次いで大正4(1915)年、南洋マーシャル群島中、ヤルット環礁の島々におい

て重力偏差を観測し、世界で初めて環礁の基盤の構造を明らかにした。また、重力偏差の測定による地下の地質構造と石油資源開発の研究、及び玄武岩の磁性に関する研究で学界に新生面を拓き昭和7(1932)年に日本学士院より東宮御成婚記念賞を授与された。とりわけ、玄武岩の磁性に関する研究は、岩石磁気学及び古磁気学の端緒となった偉大な業績である。松山は本州、九州、朝鮮、満州において多数の玄武岩標本を蒐集し、磁気の方向を測定した。その結果、現在の磁気の方向に近い方向を示す標本とそれと正反対の方向を示す標本に分かれることを発見し、地質時代第三紀の末から第四紀の始めにかけて地球磁気の方向が現在とは反対に近かったという推測に有力な根拠を提供した。このことは、チバニアンで有名となった地質時代決定の理論的な基礎となった。

昭和9・10(1934・35)年に亘り日本附近の海上重力を測定して重力偏差を見出し、三陸沖地震の原因を究明する重要な資料を提供し、世界で2例目の大きな仕事となった。

温和で愛情深かった松山を誰もが敬慕してやまなかった。己には厳しく他には優しく、学問においては非常に厳格であった。亡くなる前々日にあって南極観測隊のことを心配し、病床より激励の電報を打った。優れた教育者でもあった松山の薫陶を受けた後進の活躍が、今日の日本の地球物理学の隆盛を築いた。

会員・客員の逝去

令和元年10月以降、次の方々が逝去されました。

- 竹下守夫 会員（第2分科、民事訴訟法学専攻）
令和元年10月2日 享年87歳
- 速水 融 会員（第3分科、日本経済史・歴史人口学専攻） 令和元年12月4日 享年90歳
- 鈴村興太郎 会員（第3分科、厚生経済学・社会的選択理論専攻） 令和2年1月15日 享年76歳
- Philip Warren Anderson 客員（アメリカ・物性物理学専攻） 令和2年3月29日 享年96歳

会員の近刊紹介

- ・中根千枝、現代新書編集部構成『タテ社会と現代日本』講談社現代新書、令和元年11月
- ・田仲一成『明代江南戯曲研究』汲古書院、令和2年3月
- ・久保田 淳『藤原俊成中世和歌の先導者』吉川弘文館、令和元年12月
- ・吉川忠夫『侯景の乱始末記 南朝貴族社会の命運』志学社選書、令和元年12月
- ・難波精一郎他監修『音楽知覚認知ハンドブック 音楽の不思議の解明に挑む科学』北大路書房、令和2年2月
- ・佐藤彰一『歴史探究のヨーロッパ 修道制を駆逐する啓蒙主義』中公新書、令和元年11月
- ・菅阪直行他『社会脳から心を探る 自己と他者をつなぐ社会適応の脳内メカニズム』日本学術協力財団、令和2年2月
- ・伊藤邦武他責任編集『世界哲学史1 古代Ⅰ 知恵から愛知へ』ちくま新書、令和2年1月、同『世界哲学史2 古代Ⅱ 世界哲学の成立と展開』令和2年2月、同『世界哲学史3 中世Ⅰ 超越と普遍に向けて』令和2年3月
- ・樋口陽一『リベラル・デモクラシーの現在 「ネオリベラル」と「イリベラル」のはざままで』岩波新書、令和元年12月
- ・菅野和夫『労働法 第12版（法律学講座双書）』弘文堂、令和元年11月
- ・佐々木 毅編『比較議院内閣制論 政府立法・予算から見た先進民主国と日本』岩波書店、令和元年9月
- ・鈴木茂嗣『二元的犯罪論序説 補訂版』成文堂、令和元年10月
- ・伊藤 誠他編『21世紀のマルクス マルクス研究の到達点』新泉社、令和元年11月
- ・伊藤 誠『マルクスの思想と理論』青土社、令和2年1月
- ・京都大学経済研究所附属先端政策分析研究センター（CAPS）編、藤田昌久他著『文明と国際経済の地平』東洋経済新報社、令和元年12月
- ・野中郁次郎他著『知略の本質 戦史に学ぶ逆転と勝利』日本経済新聞出版社、令和元年11月
- ・丸山俊一、NHK「欲望の資本主義」制作班『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、令和2年2月
- ・大塚啓二郎『なぜ貧しい国はなくなるのか 正しい開発戦略を考える 第2版』日本経済新聞出版社、令和2年3月
- ・梶田隆章他著『基礎科学で未来をつくる 科学的意義

- と社会的意義』丸善出版、令和元年12月
- ・白川英樹『自然に学ぶ』法蔵館、令和2年1月
 - ・吉川弘之『一般デザイン学』岩波書店、令和2年2月
 - ・本庶 佑『幸福感に関する生物学的随想』祥伝社新書、令和2年3月

編集後記

第25号ニュースレターでは、令和2年度日本学士院賞受賞者及び新会員と新客員の紹介、第16回学術奨励賞受賞者からの寄稿、会員寄稿のほか、講演会レポートなどを掲載しています。ご寄稿いただきました先生方には心より御礼申し上げます。

また、昨年9月には、第14回日韓学術フォーラムがソウルで開催され、本院から総勢14名の会員及びスタッフを派遣し、研究発表と活発な議論が行われました。院長を始めスタッフや関係各位のご準備・ご協力のお陰で滞りなく終えることができましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、今年の冬は暖冬だったのか、寒さを感じる事が少なかったように思います。スキーシーズンを迎えた各地のスキー場は、これまでに無い雪不足に見舞われオープンすることができないスキー場が沢山ありました。上野の山も雪こそ少し降りましたが、積雪になることはありませんでした。

そして、年が明けてからは新型コロナウイルスが発生してしまいました。日本国内でも感染が拡大し、活動を自粛するなど社会・経済活動等に大きな影響を及ぼしており、今なお世界中で猛威を振るっている状況です。また、この夏開催予定でした東京2020オリンピック・パラリンピックも1年程度延期が決定されました。一刻も早い終息を願っています。

このような状況ですので、毎年、一般の方々を対象とした「公開講演会」については、今春は、新潟大学との共催で、新潟市での開催を予定しておりましたが、延期とさせていただくことといたしました。楽しみにされていた方々には申し訳ありません。今後の開催については、改めてご案内させていただきますので、よろしくお願いいたします。（H）

※受賞者、新会員の肩書きは、発表当時のもの。

◎お問合せ先

日本学士院

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32

電話：(03)3822-2101 FAX：(03)3822-2105

E-mail：gkjimu@mext.go.jp

ウェブサイト：https://www.japan-acad.go.jp/

日本学士院ニュースレター第25号

発行日：令和2年4月30日

（年2回 4月、10月発行）